

作中人物命名法

——漱石と鷗外の場合——

篠原義彦

生まれた子どもには名まえが付けられる。臨月が近づくとつれて、親は生まれてくる子が男の子であったら、あるいは、女の子であったらなどと考えて、あれやこれやと名まえについて思案するものである。その思案も束の間、産声を聞いてから十四日以内には、知恵をしぼって付けた名まえを出生届に記してフォーマルな手続をしなければならぬ。根拠条文は戸籍法第四十九条である。

生身の人間の場合は以上のとおりである。それでは文学作品に登場する人物の場合はどうか。無論のこと、戸籍法第四十九条に定める出生届などという代物は必要としない。出生届がいらぬとなると、作品を創り出す作者の思いつきの産物で、従って、インシアル程度のものであり、さほどの意味もないのかも知れない。勿論そういう類の作品も数多くあろう。

島崎藤村が明治四十一年四月七日から八月十九日まで東京朝日新聞に発表した「春」などは随分モデル性の濃い作品であるが、その

中に登場する人物、例えば岸本捨吉、青木駿一、市川仙太、菅時三郎などという人物名には、特別の意味はなさそうである。もっとも、峰子を西京といい、勝子のことを盛岡などと呼んでいる隠語めいた呼び方のほうは、広瀬恒子や佐藤輔子という藤村自身の恋人との関係で注目されるが、岡見兄弟にしろ、馬場孤蝶をモデルにした足立にしろさほどの問題はない。

ただ、青木駿一の妻操は、北村透各の妻石坂ミナと若干関連性を感ぜさせる命名ではある。

岸本捨吉なる人物名は、「春」のみにとどまらず、「桜の実の熟する時」や例の「新生」においても主人公の名まえとして用いられている。とすると、岸本捨吉という人物は単に「春」という作品を背景にした人物ではなく、「桜の実……」や「新生」の世界も背負った人物として読者の前に屹立することになる。捨吉もの、とても呼ぶに相応しい作品群ということになる。そういえば、森鷗外にも秀

磨ものと呼ばれる作品がある。「かのやうに」「吃逆」「藤棚」「鋸
一下」の四作品で、ともに五条子爵の嫡男五条秀磨が主人公である。
秀磨は学習院から文科大学を卒業した人物であり、秀磨の友人とし
て、「かのやうに」には、綾小路なる「画家き」が登場している。

綾小路のモデルは宿毛市にゆかりのある洋画家岩村透であるが、綾
小路も秀磨とともに学習院の卒業生である。五条秀磨、綾小路、そ
して、学習院、いささか意味深長なる命名法である。

明治四十年五月二十八日付の東京朝日新聞には「小説予告」と題
して「虞美人草」の予告が掲載されている。

昨夜豊隆子と森川町を散歩して草花を二鉢買った。植木屋に何
と云ふ花かと聞いて見たら虞美人草だと云ふ。折柄小説の題に窮
して、予告の時期に後れるのを気の毒に思つて居つたので、好加
減ながら、つい花の名を拝借して巻頭に冠らす事にした。

純白と、真紅と、濃き紫のかたまりが逝く春の宵の灯影に、幾
重の花弁を懃苦茶に畳んで、乱れながらに、鋸を欺く粗き葉の尽く
る頭に、重きに過ぎる朶々の冠を擡ぐる風情は、艶とは云へ、一
種、妖治な感じがある。余の小説が此花と同じ趣を具ふるかは、
作り上げて見なければ余と雖も判じがたい。

社では予告が必要だと云ふ。予告には題が必要である。題に
は虞美人草が必要で——ないかも知れぬが、一寸重宝であつた。

聊か虞美人草の由来を述べて、虞美人草の製作に取りかゝる。

鷗外の手になる「サフラン」(大正三年三月一日「番紅花」)を想

起させる筆づかいではあるが、漱石の口舌を顔面どおり受け入れて
よいものかどうか。小宮豊隆との散歩の途次、植木屋の店先に並べ
られた虞美人草の名を聞いた金の助の心の奥底に多少の漣が立った
としても不思議ではない。漱石をめぐるどかくの取沙汰のある大
塚楠緒子の同題の短篇「虞美人草」が「心の花」第十卷第七号に掲
載されたのは、明治三十九年七月のこと、東京朝日に「虞美人草」
の予告が出る十か月前のことである。

楠緒子の「虞美人草」と漱石の「虞美人草」との関係、殊に前者
の海軍士官桂吾と後者の甲野欽吾との命名法の照合関係について
は、小坂晋氏の極めて犀利な分析があり「金時計」改め「霜夜」の
藤子と従弟の数男の組み合せと藤尾と宗近一の関係の近似性の指摘
など、漱石の企てたトリックに思わず目を見張る思いであるが、小
坂氏が楠緒子の「虞美人草」の掲載誌名を明治三十九年七月の「明
星」としているのは残念の極みである。

桂吾と欽吾、それに藤子・数男と藤尾一、何かの脈絡がありそ
うな命名法である。小説の題も同じ「虞美人草」、あれこれと想像
をたくましくすればきりがないのかも知れない。漱石日記明治四十
三年十一月十五日の条には、「棺には菊^{つばき}投げ入れよ有らん程 有る
程の菊^{つばき}投げ入れよ棺の中」の句が見られる。また、二日前の十三日
の日記には、「新聞で楠緒子さんの死を知る。九日大磯で死んで、
十九日に東京で葬式の由。驚く。大塚から楠緒さんの死んだ報知と
広告に友人総代として余の名を用ひて可いかといふ照会が電話で来

る。」とある。文中の大家は楠緒子の夫大家保治のこと、こう見て来ると、「虞美人草」なる題名も、そして、作中人物の名もともにいくわくありげである。

漱石の「虞美人草」の連載が東京・大阪の両朝日で始まったのが明治四十年六月二十三日のこと、「虞美人草」の女主人公甲野藤尾の恋人の小野清三と井上孤堂の一人娘小夜子との関係は、作品の主題を背負う重要な関係である。「色相世界に住する」小野さんが小夜子のもとに帰って「第一義」の生を送るためには、紫の女藤尾は「中心を失つた石像の様に椅子を蹴返して、床の上に倒れ」ねばならなかった。孤堂先生の愛娘小夜子は小野清三の五年来の許嫁である。

漱石の「虞美人草」の第一回が両朝日に発表される六か月前の明治三十九年の十二月三十一日に東京朝日での掲載を終了したのが二葉亭四迷の「其面影」である。某私立大学で「経済原論と貨幣学の講義を担任する」小野哲也が養母と妻との愛のない生活に疲れ果てた末、思いを寄せるのが出戻りの義妹小夜子である。小野と小夜子、漱石は二葉亭の「其面影」の主人公の名をそのまま自己の作品の作中人物名とした。漱石のサーピス精神をうかがわせる命名法である。そういえば、「虞美人草」の七に次のような場面がある。

眩突は不得要領に終つて、二人は食卓を立つた。孤堂先生の車窓を通り抜けた時、先生は顔の前に朝日新聞を一面に拡げて、小夜子は小さい口に、玉子焼をすくひ込んで居た。四個の小世界は

夫れ／＼に活動して、二たゞび列車のなかに擦れ違つた儘、互の運命を自家の未来に危ぶむが如く、又怪しまざるが如く、測るべからざる明日の世界を擁して新橋の停車場に着く。

「さつき駈けて行つたのは小野ぢやなかつたか」と停車場を出る時、宗近君が聞いて見る。

「さうか。僕は気が付かなかつたが」と甲野さんは答へた。

四個の小世界は、停車場に突き当つて、しばらく、しばらくと

「四個の小世界」とは、甲野欽吾と宗近一、それに井上孤堂先生と小夜子のこと、孤堂先生が拡げている「朝日新聞」とは、沼津駅で手に入れた東京朝日のことであろう。営業精神抜群の漱石である。

筆子、恒子、栄子、愛子、純一、伸六、ひな子——漱石夏目金之助の子どもの名まえである。ありふれていて、親しみやすく、平凡な命名である。於菟（おと）、茉莉（まり）、不律（ふりつ）、杏奴（あんぬ）、類（るい）——鷗外森林太郎の三男二女の名は、随分凝っている。それに、於菟の子どもが真章（まかつ）と富（とむ）、

富の息が万里男となると鷗外の伝統が生きている感さえする。日本人離れして、さすがに西学東漸の門に相応しい命名法であるし、シュルツのドイツ語での講義を漢文でノートしただけのことである。鷗外の次弟篤次郎のペンネームもまた凝っている。三木竹二、「三木」は「森」から、「竹二」は「篤次」からである。石黒忠憲日記の「多木子」という鷗外の変名にも相通じるみごとな雅号の付

け方である。森林太郎の中に「木」なる字を五字見出して付けたのが「多木子」、「木」は「氣」に通じ、帰国四日後の明治二十一年九月十二日の偕行社における石黒忠恵の帰朝報告の中に見られる「森氏ノ風ニ於ケル余ハ諸君力之ヲ学フヲ欲セズ何トナレバ余ノ見ル所ニヨレバ独乙士官ノ風ニハアラズ寧ろ独乙ノ風流家ノ風多シトモ言フ可キカ」という言辞の中に用いられている「風流家」なる呼称は、「多木(氣)子」と平仄が合っている。

鷗外は明治四十三年三月一日発行の「昂」に「青年」の「志」及び「式」を発表している。「青年」は翌四十四年八月一日の「昂」まで十八回にわたって連続して掲載され、大正二年二月十日靱山書店から単行本として刊行された。「小泉純一は芝日蔭町の宿屋を出て、東京方眼図を片手に人にうるさく問うて、新橋停留場から上野行の電車に乗った。目まぐるしい須田町の乗換も無事に済んだ。扱本郷三丁目まで電車を降りて、追分から高等学校に附いて右に曲がって、根津権現の表坂上にある袖浦館といふ下宿屋の前に到着したのは、十月二十何日かの午前八時であった。」という「青年」の冒頭で、昨夕はじめて新橋に着いた田舎者の青年小泉純一が手にする「東京方眼図(索引付)は、「青年」の「志」「式」が雑誌「昂」に発表される六か月前の明治四十二年八月十五日、春陽堂から発行された。鷗外自身の立案になるものである。「此書及図のもちるかた。『肴町』といふ処に往かんと思はば、五十韻の順序にて、『サ』の部を順次に見るべし。六〇乃至六一面に『サカナマチ』といふ町

東京に三箇所あるを悉く記せり。本郷のならば、『本郷区駒込』にて、図の縦は『ほ』横は『二』の方眼内にあり。其他準へて知るべし。」という注意書きの付せられた「東京方眼図」を片手にしての椋鳥小泉純一の大石狷太郎訪問は、「人にうるさく問」いながらではあるが所期の目的を達しえた。「虞美人草」の七で「朝日新聞」を登場させた漱石と同様に、鷗外も営業精神旺盛である。

「青年」は漱石の「三四郎」を意識した作品である。漱石の「三四郎」が小川三四郎と里見美禰子のところの問題であったのに対して、「青年」は小泉純一と未亡人坂井れい子の肉と心の問題が扱われている。「キタ・セクスアリス」(明治四十二年七月一日「昂」)の筆者に相応しい作品である。「美しい肉の塊」のためには、「力士めいた銅人形」が必要であることを知った純一は、坂井未亡人と「恩もなく怨もなく別れ」て箱根の山を下りることになる。「便所からの帰りに、ふと湯に入らうかと思つて、共同浴室を覗いて見ると、誰か一人這入つてゐる。蒸気が立ち籠めて、好くは見えないが、湯壺の側に蹲つてゐる人の姿が女らしかった。そしてその姿が、人のけはひに驚かされて、急いで上がらうとするらしく思はれた。純一は罪を犯したやうな気がして、そつと其場を逃げて自分の部屋に帰つた。」のは、鷗外作「青年」の主人公の方である。「注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考へる間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらはれた。漲り渡る湯煙りの、やはらかなる光線を一分子毎に含んで、薄紅の暖かに見える奥に、溌はす黒髪

を雲とながしてあらん限りの背丈を、すらりと伸した女の姿を見た時は、礼儀の、作法の、風紀のと云ふ感じは悉く、わが脳裏を去つて、只ひたすらに、うつくしい画題を見出し得たとのみ思つた。」⁽¹⁰⁾

——「草枕」の一節である。わずかながらではあるが漱石の方が罪深い。

夏目純一が金之助と鏡子の長男としてこの世に生を受けたのは、明治四十年六月五日のこと、鷗外の「青年」の主人公と同名であるのは、無論偶然のなせるところであり、「青年」の作者のあざかり知らざるところであろうが、「こゝろ」の場合はどう考えればよいのだろうか。

夏目漱石の「こゝろ」は大正三年四月二十日から八月十一日まで百十回にわたつて東京・大阪の朝日新聞に連載された作品である。「先生と私」が一から三十六まで、「両親と私」が一から十八、そして、「私は此夏あなたから二三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあつたのは、たしか二度目に手に入つたものと記憶してゐます。私はそれを読んだ時何とかかしいと思つたのです。少なくとも返事を上げなければ濟まんとは考へたのです。然し自白すると、私はあなたの依頼に対して、丸で努力をしなかつたのです。」⁽¹¹⁾で始まる「先生と遺書」が一から五十六までである。「こゝろ」という作品は、「此手紙が貴方の手に落ちる頃には、私はもう此世にはゐないでせう。とくに死んでゐるでせう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病氣

で手が足りないといふから私が勧めて遣つたのです。私は妻の留守の間に、この長いものゝ大部分を書きました。時々妻が帰つてくると、私はすぐそれを隠しました。私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です。然し妻だけはたつた一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に對してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのですから、私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい。」という文章で終つてゐる。文中の「妻」は勿論「さい」と読む。「こゝろ」一一〇のうち、「先生と遺書」は全体の約半分の五十六を数えている。漱石の「こゝろ」は、鷗外の「興津弥五右衛門の遺書」(初出 大正元年十月一日「中央公論」)と並ぶ遺書文学の双璧である。

「淋しい人間」である先生は、「妻に残酷な驚怖(おどろ)を与へる事を好みません。」と記している。妻に對して血の色を見せたくない先生は、妻を市ヶ谷の叔母のもとに遣り、その留守中に「此世から居なくなるやうに」するつもりである。先生は、「私」に對して「私は妻を残して行きます。」と認めてゐる。先生の妻は「静(しづ)め」といつた。

「先生と私」の九には次のような描写がある。

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一对であつた。家庭の一員として暮した事のない私のことだから、深い消息は無

論解らなかつたけれども、座敷で私と対座してゐる時、先生は何かの序に、下女を呼ばないで、奥さんと呼ぶ事があつた。(奥さんの名は静といつた)先生は「おい静」と何時でも襖の方を振り向いた。その呼びかたが私には優しく聞こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚だ素直であつた。ときたま御馳走になつて、奥さんが席へ現はれる場合杯には、此關係が一層明らかに二人の間に描き出される様であつた。

「門」の宗助と御米同様に子どもいない夫婦の生活は静寂そのものである。先生の奥さんの名として、「静」は相応しい名まえである。

大正元年九月十三日夜八時、明治天皇の靈輻発引の号砲を合図に赤坂区新坂町の自邸で乃木大将希典は自らの命を絶つた。鷗外日記九月十三日の条には、「輻車に扈隨して宮城より青山に至る。午後八時宮城を發し、十一時青山に至る。翌日午前二時青山を出でて帰る。途上乃木希典夫妻の死を説くものあり。予半信半疑す。」とある。また、五日後の十八日の日録には、「午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津与五右衛門を帥して中央公論に寄す。」とある。既に触れたように「興津弥五右衛門の遺書」は乃木希典の死を象徴した遺書文学である。

漱石は無論のこと、あの「虞美人草」の井上孤堂先生までが沼津駅で買って読んだはずの東京朝日新聞の九月十七日付紙面第五面には、乃木希典の遺書三通が発表されている。一通は小笠原長生あて

の「九月十二日」付のもの、次が「大正元年九月十二日夜」と記された「遺言条々」なるもの、最後が「九月十二日」付の石黒忠恵あてのものである。

二番目の遺書、すなわち、「遺言条々」の第一には、最も重大なことが記されている。

自分此度御跡を追ひ奉り自殺候処恐入候儀其罪は不軽存候然る処明治十年役に於いて軍旗を失ひ其後死処を得度心掛候も其機を得ず皇恩の厚に浴し今日迄過分の御優遇を蒙り追々老衰最早御役に立つの時も無余日候折柄此度の御大變何共恐入候次第茲に覚悟相定め候事に候

すなわち、乃木は明治十年二月二十二日の植木口での戦鬪での軍旗喪失事件に触れ、三十五年にわたる希死念慮の生を告白している。

第一条に始まり第十条に至る「遺言条々」は三通の遺書の中で最も長く、かつ、具体的であり、乃木の真情が吐露されたものである。そして、「遺言条々」の宛名は、「湯地定基殿大館集作殿玉木正之殿静子どの」となっている。「静子どの」とはだれのことなのか。

「遺言条々」の第九には「静子儀追々老境に入り」云々の記述が見られ、後書きにも「右の外細事は静子へ申付置候間御相談被下度候伯爵乃木家は静子生存中は名義可有之候得共呉々も断絶を遂げ候儀大切なり」と記されている。「静子どの」とは、鹿兒島藩士湯地定之の四女で、乃木大将希典の夫人静子のことである。乃木が「遺言条々」を認めた九月十二日夜の段階では、乃木ひとりの殉死のは

ずであった。しかし、鷗外がその日録に「乃木希典夫妻の死」と記したことに間違いはなかった。

漱石も見、そして、孤堂先生も見たかも知れない十七日付けの東京朝日新聞第五面下段部には「検案の模様」と題して、中村医士（中村）の談話が掲載されている。その中に、「大將は長劍 二太刀腹を切つて後咽喉を刺し貫く」「夫人は短刀 胸を突くこと二度 心臓を突き刺す」という小見出しを付して希典静子夫妻の死体検案の状況が詳しく報ぜられている。

「先生と遺書」の五十五では明治天皇の崩御のことが、そして、続く五十六では乃木大將のことが出てくる。

私は新聞で乃木大將の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死ぬう／＼と思つて、つい今日迄生きてゐたといふ意味の句を見た時、私は思はず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きてゐて来て来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。乃木さんは此三十五年の間死なう／＼と思つて、死ぬ機会を待つてゐたらしいのです。私はさういふ人に取つて、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。

とある。「虞美人草」の流儀に従えば、文中の「新聞」とは東京朝日のこと、そして、「乃木大將が死ぬ前に書き残して行つたもの」は

三通の遺書であり、「西南戦争の時」云々は、「遺言条々」の中の、既に引用した第一条ということになる。「こゝろ」の先生の奥さんの名が「静」であることの意味は深い。漱石があえて（奥さんの名は静といつた）と記したことの意味は重要である。「私は妻に残酷な驚怖を与へる事を好みません。」の一文は、「こゝろ」の先生のせめてもの抵抗である。乃木大將希典夫妻も先生夫妻ともに子どもがなかった。乃木の息勝典・保典ともに日露戦役で死し、一方「こゝろ」の先生は子宝に恵まれなかった。「私」に対して「天罰だからさ」と答える先生は「淋しい人間」である。

漱石の息純一と「青年」の主人公名の一致は偶然的いたずらであつたが、「こゝろ」の先生の奥さんの名「静」は乃木大將希典の夫人静子の名に拠っている。そして、鷗外も漱石もともに、乃木大將の三十五年の希死念慮の生を手がかりとして作品を創造した。すなわち、「興津弥五右衛門の遺書」と「こゝろ」であり、その手法はともに鮮やかというほかはない。

手法の鮮やかさという点では、「青年」という作品も注目される。天長節の午後、瀬戸の誘いで、とある倶楽部に拈石なる人物の話を聞きに行く場面が「青年」の六にある。拈石の話が始まる前の会場の会話が次のように描写されている。

「それでも教員を罷めたのなんぞは、生活を芸術に一致させようとしたのではなからうか。」

「分かるもんか。」

目金の男は一言で排斥した。

今まで黙つてゐる一人の伶俐らしい男が、遠慮げな男を顧みて、かう云つた。

「併し教員を罷めた丈でも、鷗村なんぞのやうに、役人をしてゐるのに比べて見ると、余程芸術家らしいかも知れないね。」

話題は拊石から鷗村に移つた。

純一は拊石の物などは、多少興味を持つて讀んだことがあるが、鷗村の物では、アンデルセンの翻訳文を見て、こんな詰まらない作を、よくも暇潰しに訳したものだと思つた切、此人に對して何の興味をも持つてゐないから、会話に耳を傾けないで、独りで勝手な事を思つてゐた。

一読して分かるやうに、俎上に載せられている「教員を罷めた」拊石とは漱石のこと、そして、「役人をしてゐる」鷗村とは鷗外自身のこと、アンデルセンの「詰まらない作」を「暇潰しに訳した」とは、明治二十五年九月十日に始まり、同三十四年一月十五日に小倉の寓居でその訳業を完成した「即興詩人」のことである。「ライフとアアトが別々になつてゐる奴」鷗外は漱石枕流をあえて「拊石」と交えて登場せしめてゐる。「拊」とは手のひらでたくことをいう。

「拊石」、石を手のひらでたくとは、「厭味」である。「伶俐らしい男」は、「厭味だと云はれるのが気になると見えて、自分で厭味だと書いて、その書いたのを厭味だと云はれてゐるなんぞは、随分みじめだね」と鷗村を評している。「森先生の小説を読む

毎に、私は何か別のものが欲しくなる。森先生は余に平靜である、

余に公明である、少くとも我々年若い者が御手本にするには。⁽¹³⁾

と書いた啄木こと石川一が小泉純一の背後に見え隠れする。もつと

もあの「ローマ字日記」に見られるような凄絶さは、純一にはない

が、「石川一（はじめ）」と「小泉純一」と、絶妙な対応である。

そういえば純一が大村莊之助とともに停車場の一等待合で見かけた「有名な高島詠子さん」と下田歌子との対応も絶妙である。「高

下」「畠田」「詠歌」とすると「小石川」などという地名を引き

出すのもあながち邪道でもなさそうである。鷗外森林太郎は「東京

方眼図」の立案者である。因みに啄木はその死の八か月前、寓居を

宮崎郁雨の援助で小石川区久堅町七十四ノ四十六号に移している。

明治四十四年八月七日のことであり、鷗外の「青年」の最終回が

「昂」第三年第八号に発表された六日後のことである。無論偶然の

いたずらではある。

森鷗外が「青年」連載中に、「三田文学」に発表した作品に「カズ

ズイスタカ」がある。明治四十四年二月一日のことである。「カズ

イズスタカ」casusicaは「臨床記録」というほどの意味で、青年医

師花房とその父である老花房の「生」を對比して、「宿場の医者た

る」⁽¹⁴⁾に安んじて生きる父花房の resignation の態度に「有道者の面

目」を見出す花房学士の心情が描かれた部分と、三症例、すなわち、

落架風、一枚板、それに生理的腫瘍の臨床例が描かれている部分か

ら成る作品であるが、父花房に對比して診た花房学士のカルテを自

已診断と把握すれば、「カズイスチカ」は合計四症例の報告書ということになる。

「生理的腫瘍」とは、「cliente」として対してゐる「花房自身が「ひどく媚のある目」だと思つた女の懐妊の診断であるが、「腫瘍は腫瘍だが、生理的腫瘍だ。」とは人を買つたような呼称である。そして、この花房、医師の手伝いをする越後生まれの書生が「佐藤」であり、落葉風の青年が診察に訪れた時、千住の家の門口で羽根を ついていて、思わず「きやつ」と言つて奥の間へ飛び込んで来た、花房の妹の名が藤子である。花房に佐藤に藤子、すべて藤で統一した名まえである。

鷗外の妹小金井喜美子が明治四十四年一月一日発行の「昂」に発表した作品に「千住の家」がある。「千住の家」は藤子という主人公の兄が洋行する際に、妹にと手渡した「紙に包んだ物」の描写で終っている。「上を包んだ新聞紙を取れば、中は西洋紙にペンで書いてある。『源氏物語一部。琴一面。藤子へ。兄より。』中には紙幣が這入つてゐる。三人顔を見合せた。其晩すぐに山谷へ手紙を出して、『御話の琴何卒御世話願上候』と云つて遣つた。翌朝早くお母あ様と車に乗つて浅草の須原屋へ源氏を買ひ行つた時の喜ばしさは、年月立つた今日も忘れぬ。」、更級日記の一節を思わせる文章であるが、喜美子の「千住の家」のわずか一か月後に発表されたのが鷗外の「カズイスチカ」である。妹と兄、喜美子も林太郎もともに千住の家の想い出に耽つている。「カズイスチカ」の藤子は、

「千住の家」の藤子と同一人物である。鷗外が「カズイスチカ」の作中人物の命名に際して、「藤」を存分に意識したのも宜なるかなである。

「青年」の小泉純一が坂井れい子と「恩もなく怨もなく」別れて箱根の山を下りた後に「雁」の世界が出現する。「青年」の最終回、すなわち、二十四が「昂」に掲載されたのが既に触れたように明治四十四年八月一日のこと、そして、一か月後の九月一日発行の「昂」には「雁」の「菖」「式」「参」が発表されている。「雁」はそれ以後「式拾菖」までが「昂」に断続的に掲載され、いわゆる「青魚の未醬煮」の登場する「式拾式」以下「式拾肆」までは雑誌に発表されず、大正四年五月十五日、単行本「雁」刊行時に発表されたものである。

「雁」の男性作中人物、すなわち、医学生岡田と高利貸未造の命名法については、入沢達吉著述「入沢先生の演説と文章」⁽⁵⁾の中の「其上に其頃の本科生は皆大学の小使上りの岡田、元助と云ふ専門の高利貸「痞」と云ふ綽名があつた、其男から高利の金を、背負ひ切れない程借金して居つた。」(傍点筆者)なる一文を紹介するのが第一の務めである。そして、佐藤良雄氏の「『雁』のモデルと開成学校・医学校」⁽⁶⁾の中の「高利貸は金を貸すのが商売であり、借りた方からみれば、その金はカリガネであり、カリである。そして、どちらも鳥の名のガン(雁)に通じるものである。ところがカリガネやカリはシャッキンとおなじように、むきだしな言葉である。隠

語にするにはガン（雁）がよい。そして、それがガン（糖）にかわる。高利貸には執拗さがある。病気のガンも執拗である。そういうところからこの言葉も生存価値を見出してゆく。」という指摘と、それに続く、「岡田元助が末造のモデルであるという見方をさだめておいて考えてみると、元助の一字モト（元）に対する語のスエ（末）を高利貸の名にして、末造なる人物をつくり出したのは洒落でないか。末造は『雁』の中ではいつも名だけでよばれている。姓の方はどうしたか。それは面白いことに医学生の岡田となつてい

る。岡田は名を以てよばれることなく、姓でいつもよばれている。こうして、一人の名前である岡田元助を半分に割つて、お玉の主人と恋人とを書きわけたとすれば随分の洒落である。日本文学の中では、隠された洒落をよみとらねばならぬことがよくある。」とを引用するのが第二の務めである。知的遊戯は古今和歌集以来の伝統であり、岡田元助なる人物の上半身をとって医学生岡田とし、下半身の「元」を「末」に変えて、高利貸の名としたのは、心憎いかぎりである。

前掲の入沢達吉教授の回顧談の中には、「無縁坂門」のこと、「切通坂下の豊国屋と云ふ牛肉屋」のこと、山下の「雁鍋」のこと、「無縁坂下の角」にあった「忍亭と云ふ湯屋」のことなどに触れられており、鷗外森林太郎の「少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友」についても、「二階の本科生は酒を飲んで暴れて毎晩大騒動をやつた。賀古鶴所氏杯は随分元気が良かった。」と記さ

れている。無縁坂下の角にあった「忍亭と云ふ湯屋」は、もしかすると、「紺縮の単物に、黒繻子と茶献上との腹合せの帯を締めて、織い左の手に手拭やら石鹼箱やら糖袋やら海綿やらを、細かに編んだ竹の籠に入れたのを懈げに持つて、右の手を格子に掛けた儘振り返つた」女が今しがた出て来た湯屋なのかも知れない。忍亭は今の「かりがね荘」のあるあたりにあったのであろう。入沢達吉の興味津々たる回顧談、佐藤氏の洒落を読み取る分析力、ともに刺激的である。

ただ残念なのは、佐藤氏が「雁」の中の「男性」にのみ注目して、女性作中人物に言及していない点である。坂下の忍亭からの「湯帰り」の女が岡田にはじめて会うのが無縁山法界寺の名にちなんだ「無縁坂」であり、従つて、「雁」という小説は、少なくとも医学生岡田にとっては、「恩もなく怨もなく別れた女の話」として幕を閉じることをはじめから読者に告げていることに思い至る時、女性作中人物の命名法についても一考を要するのではなからうか。

「湯帰りの女」の住む無縁坂の格子戸のある寂しい家の右隣りは、お貞（てい）という女が裁縫を教えている家である。「雁」の「拾陸」には、次のように描かれている。「師匠はお貞と云つて、四十を越してゐるのに、まだどこやら若く見える所のある、色の白い女である。前田家の奥で、三十になるまで勤めて、夫を持つたが間もなく死なれてしまつたと云ふ。詞遣が上品で、お家流の手を好く書く。」——「お貞」の「貞」は、裁縫のお師匠さんの性格標語

でもある。貞淑・貞操・貞良・貞節、名は体を表すの類であろう。

下谷にあった医学校が本郷に移るとともに、末造の一家も池の端に移ることになった。高利貸で成功した末造がいつしか「慊(あきたらな)く思ふやうに」なった「醜い、口やかましい女房」の名は「お常」という。日常的な凡庸の中で、子どもを育て、「着物一つ拵へてくれない」歳月を過ぎてきたお常が無縁坂の「囲物」に気づいて末造に迫る場面が「拾貳」にある。「末造はこはれた丸鬘のぶるく震えてゐるのを見て、醜い女はなぜ似合はない丸鬘を結びたがるものだらうと、気楽な問題を考へた。そして丸鬘の震動が次第に細かく刻むやうになると同時に、どの子供にも十分の食料を供給した、大きい乳房が、懐爐を抱いたやうに水落の辺に押し附けられるのを末造は感じながら、『誰が言つたのだ』と繰り返した。」とある。恒常性の中に生きるお常を「慊く」思つた末造の憧憬が「お玉を目の球よりも大切にしてゐた」(肆、傍点筆者)爺さんから娘を奪い取り、無縁坂の「囲物」にしてしまった。「璞(あらたま)の儘」(拾叁)であつたお玉が「意識して体を磨く」ようになるとともに、お玉の美しさは一層光沢を増して行つた。そのお玉が日ごろやって来る髪結いの女から「余所行の時に結びに往け」と紹介された髪結いのところへ行つて、「いつもと丸で違つた美しさ」で岡田を待たのが下宿屋上条の膳に青魚の未醬煮が上つた明治十三年の歳晚初冬の夕刻であつた。

お常が日常性、平板性を象徴する命名であるのに対して、お玉は

その美質を象徴する名まえである。玉のような美しさ、璞に磨きかけられたのが無縁坂の女お玉である。お玉は父親の爺さんにとつても、また、高利貸末造にとつても、文字どおり、「玉」であるとともに、「女と云ふものは……(中略)……只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安じて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならぬ」とする医学生にとつても「玉」であつた。それだけにとどまらず、かつて小倉の寓居から賀古鶴所あてに「好イ年ヲシテ少々美術品ヲシキ妻ヲ相迎ヘ大ニ心配候処万事存外都合宜シク御安心被下度候」と認めた鷗外その人にとつても憧憬の対象であつた。お玉が作者鷗外と同じ年の生まれであるのも無理からぬところである。

「半日」の主人公文科大学教授高山峻蔵博士の一人娘の名は「玉ちゃん」である。鷗外の長女茉莉(まり)、隠し妻兒玉せき、それに「キタ・セクスアリス」の十九歳の条の「あなた私の名はポオルよ、忘れちやあ嫌よ」と言つた芸者を列挙すれば、お玉という女主人公の命名の由来はその底を見せてしまう。「ポオル」について、「お玉とでも云ふのであらう。」という一文を付記することを忘れたなかつた鷗外は、今度は「お玉」を主人公の座に据えて明治十三年の世界にスポットを当ててみた。それが「雁」の世界である。

お玉にお常に、それにお貞、三人ともに「お〇」型の命名である。「お〇」型の命名が「雁」の世界を支える女たちの生きた場の古めかしさを教えてくれるとともに、「玉」「常」「貞」はそれぞれの

女性の性格微標語でもある。二葉亭四迷の「浮雲」の内海文、三と本田昇、それにお政、お勢の母娘がそれぞれの運命と性格を象徴する名まえであったと同様の意味において、「雁」の女性作中人物の命名法も十分留意すべきであろう。

鷗外の後を追って来日した Elise Wiegert を「エリス・ワイゲルト」とわずかに変えて「舞姫」の女主人公の名とした鷗外の手法は「雁」においても依然として衰えを見せない。「舞姫」の太田豊太郎とその友人相沢謙吉の命名に関しては長谷川泉氏の鋭い分析があるが、命名法についての探究は案外おろそかにされているのが実情ではなからうか。その意味において、磯田光一の「鹿鳴館の系譜」で触れられている「金色夜叉」の人物名の問題は参考になる点が多いが、江川卓氏の「謎とき『罪と罰』」に至っては、驚嘆というほかはない。江川氏は、ドストエフスキーの「『罪と罰』の作中人物たちは、そのほとんどが『意味のある』名前を持っている。日本名としていくぶん、据わりの悪いことを我慢すれば、おおかたが『翻訳』可能でさえある。」⁽²³⁾としたうえで、「罪と罰」の主人公ラスコーリニコフを「割崎英雄」と「翻訳」している。含蓄の深さを味わうべきであろう。

ガンベッタの兵が、あるとき突撃をし掛けて鋒が鈍った。ガンベッタが喇叭を吹くと云つた。そしたら進撃の譜は吹かないで、réveil の譜で吹いた。イタリア人は生死の境に立っていても、遊びの心持がある。兎に角木村の爲めには何をするのも遊びであ

⁽²⁴⁾ 鷗外が明治四十三年八月一日発行の「三田文学」に発表した「あそび」の一節である。文中の「réveil の譜」とは起床ラッパのこと、目の醒める思いがする。作中人物「木村」ならずとも、「遊びの心持」は失いたくない——。

注

(1) 「初期漱石文学と大塚楠緒子文学——『虞美人草』と『薤露行』の場合——」(『国語と国文学』第六十一巻第六号、昭和五十九年六月)

(2) 「漱石全集」(岩波書店) ⑬—五七六

(3) 「漱石全集」⑧—六四

(4) 「漱石全集」⑧—四二二

(5) 竹盛天雄「石黒忠恵日記抄」(三) (『鷗外全集』月報

38) 明治二十一年六月二十六日の条)

(6) 竹盛天雄「石黒・森のベルリン淹留と懐婦をめぐる——緑の眼と白い薔薇——(上)」(『文学』昭和五十年

九月)

(7) 「鷗外全集」⑥—二七五

(8) 「鷗外全集」③⑧—二一九

(9) 「鷗外全集」⑥—四六五

(10) 「漱石全集」②—四六九

- (11) 「漱石全集」⑥—一五〇
- (12) 「鷗外全集」③⑤—五六八
- (13) 「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」(「石川啄木全集」④—二六筑摩書房)
- (14) 「鷗外全集」⑧—七
- (15) 入沢内科同窓会編(昭和七年克誠堂刊)——東京大学医学部図書館蔵WZ100 I
- (16) 「鷗外」4 (森鷗外記念会 昭和四十三年十一月)
- (17) 大正十一年七月六日付遺言(「鷗外全集」③⑧—一二二)
- (18) 明治三十五年二月八日付書簡(「鷗外全集」③⑥—一四九)
- (19) 「鷗外全集」⑤—一五三
- (20) 金山重秀・成田俊隆「来日したエリーゼへの照明——『舞姫』異聞の謎解き作業の経過——」(「国文学解釈と鑑賞」第四十六巻八号 昭和五十六年八月)
- (21) 「続 鷗外『キタ・セクスアリス』考」(明治書院)、
「鷗外作中人物命名のパズル」(一九八二年七月十八日付「図書新聞」)
- (22) 文芸春秋社刊 七六頁
- (23) 新潮社刊 三一頁
- (24) 「鷗外全集」⑦—二四四

(高知大学教育学部教授)

會員近著紹介
鮑參軍集索引 山田 英雄 編

鮑參軍とは、六朝文学を代表する詩人であり駢文家である宋の鮑照、字は明遠のことで、本書はその詩文集の一字索引である。編者山田教授はこれをほとんど独力で完成された。本書によって、鮑照の使用した語彙の全面的把握が初めて容易になり、鮑照研究に益するところ大なるものがあると言える。また、ひとり鮑照の文学のみならず、広く六朝文学、さらには唐代文学の研究に際しても、本書は少なからぬ恩恵を与えてくれるであろう。近年、六朝や唐の詩人の一字索引がいくつも編まれているが、またひとつ、中国文学研究のための有益な工具書が提供されたことを喜びとしたい。

一九八七年七月一日発行

B5版 三〇七頁 五〇〇〇円

崑崙書房刊